

現代俳句散歩（二）（四月・五月）

（現代俳句カレンダー2025より）

佐怒賀正美

蝶よ川の向こうの蝶は邪魔ですか 池田澄子

この句は、川岸に立って春の蝶を眺めているのであろう。大河ではなく川向こうの蝶が見える小川や堀川くらいの規模のものかもしれない。作者が眺めていた此岸の蝶たちは、なぜか川を渡っていない。自分たちの仲間だけで楽しんでいるように目に映る。その時、ひよっとしたら、対岸の蝶たちはこちら側の蝶たちにとって「邪魔」なのかもしれないとふと感じた。唐突でけっこう強引ながら、蝶の世界の中に人間世界の差別や敵対意識を二重写しに感じ取ってしまったのだ。川というのは重要な水運の役割を果たすと同時に、二つの向き合う土地を分けて、彼此に異なる文化を育んだりもする。時には、彼此の住民感情がぶつかり合ったり、敵対することもある。現代では、国内のヘイトスピーチに始まり、ウクライナへのロシアの侵入、欧州に見る右傾化など、「邪魔」という語が時代を支配しかねない情勢にある。蝶に代表される春うららかな陽ざしの中で、時代の本質的な危機感をさらりと蝶（＝読者）に問いかけた軽妙な句。語りかけのような口語のリズムも生かされている。

さくら見る先生ふいに挙手の礼

桃花水仏顔なる牧の馬

室生幸太郎

窪田 英治

白孔雀放し飼ひなる日永かな

黒岩 徳将

昨秋逝去された室生氏の句は、やさしい表現の中に、恩師の生きてきた時代背景が不意に見えた驚きを詠んで印象深い。二句目、「桃花水」とは「桃の花の咲く三月ごろ、雪・氷が解けてあふれるばかりに流れる川の水」（『日本国語大辞典 第二版』）。雪解水のほとりに春を迎えて安らいだ馬の表情が見える。三句目は、春うららの日差しの中に白い孔雀を描いた佳品。神聖さを感じさせるような白さは心を癒してくれそう。孔雀の自由な在り方が作者にも尊い。

寛といふ兜太が贈りくるゝもの

宮坂 静生

カレンダーの五月より。『字通』には、「虹に雌雄の別があり、色の鮮やかなものは雄、色の暗いものは雌寛（しげい）。虹の首尾に竜形の頭があり、兒はその象形」とあるが、もちろん「虹」の語義もある。兜太の秩父から届いてくるような殊に美しい虹であったのだろう。天上に去った兜太は、地上の俳人たちに分け隔てなく「虹」を贈ってくれた。兜太への思いが瑞々しいかたちで表れた句だと思ふ。

言葉になる前の手のひら青嵐

中内 亮玄

椰子の木を素足で登る児の速さ

霧野萬地郎

穂高岳三里晴なる袋掛

和田 照海

一句目は、やや抽象的ながら、ジェスチャーなど言葉を発する直前の手の仕草を思い浮かべた。あるいはまだ言葉をしゃべれない赤子の手のひらの表情か。青嵐の光が明るい。二句目、南国などの風景か。木登りの児の元氣よさが心地よい。「素足」にこそ木肌がなじむ。穂高岳の句も、広く晴れ渡って、袋掛けの作業もすがすがしい。

現代俳句散歩（一）（二月・三月）

（現代俳句カレンダー2025より）

佐怒賀正美

あいまいに笑ひて鯨の通りけり

小林 貴子

につぼんをどの色にする春一番

山本 敏倅

まずは二月の短冊から。水族館などでの出会いか。鯨はたしかに正体不明の笑いを見せる。金子兜太の「梅咲いて庭中に青鯨が来ている」の青鯨は笑っていたかどうか。一方、小林作、寧猛さを隠しながら「あいまいに」笑って通る鯨は、いまの軍事的緊張感を孕んだ国際情勢や、下心を隠して政治経済を推し進める権力者たちの暗喩ともとれる。独り立ちした俳句は独り歩きを始める。山本作、春一番の季節、現代の為政者たちは「につぼん」をどの色に染めるのか。心配は大きいが、作者だったら、佐保姫と一緒に木の芽や若草や花や昆虫などで、多彩な生命色を散りばめるだろう。社会批評を底に敷いてはいるが、敏倅さんらしい大らかな現代俳句である。

どこにでもある小林と野焼見

仲 寒蟬

小林姓の人には申し訳ないが、この「小林」は笑いと共にすつきりと収まっている。坪内稔典さんの「たんぼぼのぼぼ」みたいなユニークで気さくな滑稽の句。二番煎じが効かない独自の発想だ。

薄氷の鼓膜地球にも余命

瀬戸優理子

しんがりの野鳩寒かる樹と話す

山崎 政江

何語るでもなく父子息白し

本郷 秀子

山笑ふ奥嶺は笑ひこらへをり

田村 正義

地球の余命を「薄氷」（しかも鼓膜）から感じた詩感覚のよさ。

野鳩を見遣りながら「あの鳩寒そうだね」と樹と話している作者。三句目、こんな父子関係、いまでも捨てたものじゃない。息の白い通い合いがうれしい。奥嶺が笑うのはこれから。いや、すでに笑いをこらえている、というユーモア。何気ない楽しさの句が並んだ。

三月の短冊には、「蛇穴を出でてゴドーに懷きけり 佐怒賀正美」も載せていただいているが、同じ月で惹かれたのは次の句。

さんしゆゆのあかり しよんぼりさんおいで 恩田侑布子

昭和ノスタルジ的な童謡ふうの仕立てながら、「しよんぼりさんおいで」は現代の気弱な子などにも通うやさしい呼びかけ。山菜莢の花は黄金色ながら、偉ぶらず、細かな光を投げかける。ささめくような笑いで子を誘い待っているようだ。

鉄橋の鉄うすみどり春の川

田中 亜美

手鏡をちよつと借りたり卒業式

岡田 由季

後ろから鈴の音を足す遍路道

秋岡 宣子

海底の闇をすくってめげる目

及川真梨子

田中作の、硬軟取り合わせた、パステルカラーのような春の景。高校生ぐらいだろうか。手鏡の借用から刻まれる卒業式の日、一瞬の自画像。鈴の音と共に後ろから遍路に加わり同じ景を進む心の温かさ。まんまるのメバルの目は、海底の闇を掬った黒さであった。いずれも具体的な一点から景が広がる。

現代俳句散歩（二月）

〈現代俳句カレンダー2025より〉

佐怒賀正美

うさぎめく君ら花びら餅日和 赤羽根めぐみ

現代俳句協会の今年のカレンダーの一月は、

土中こそ聲あふれおり福寿草 高野ムツオ

の色紙に始まり、二十三名の協会の新年の句が並ぶ。その第一句が上掲の赤羽根さんの句である。ちなみに、高野氏の「福寿草」は正月用の鉢植えではなく、野生のものであるが、土中のさまざま生物の音が立ち昇ってくるようで、ゆたかな心持にさせられる。他にこんな句も。

たちまちに遠景となる大旦 嶋原さき子

木と紙の国と言はれて空つ風 鈴木 牛後

生国の海を語らい年酒酌む 村上 友美

たしかに我々は、期待と共に元旦を待ちわびるが、当日が過ぎるとあつという間にどんどん離れて行ってしまう。「遠景」とは、時間的意識を空間的イメージに変える作者の魔法だ。また、二句目は一冬を厳しく吹きつのる空つ風に対して、家屋の方は堅固な石でも煉瓦でも鉄でもなく、「木と紙」であると、やや誇張気味に日本の精神的風土にも踏み込んだようなあしらいになっている。三句目、年酒を交しているのは旧知の友同士か。いつの間に話題はそれぞれの生国の「海」のことに及ぶ。広やかな豊穡の海、荒れ狂った海、

多様な海の記憶を地酒歓談しながら三箇日はどんどん過ぎてゆく。深い記憶が豊かに繙かれるのだ。

話を元に戻すと、冒頭の赤羽根さんの句の軽妙な明るさ異色とも言える。「花びら餅日和」は大胆な造語だが、雅な雰囲気は残しながらも、ここでは市井に下りている。柔らかな肌触りを思わせる淑気と言えようか。そして、痛快なのは、それらの「静」の気品を子供らの命が明るくかき回す。幼子たちは「うさぎめく」さまに敏捷に軽快にはしゃぎまわり、生命の光を振りまく。いま眼前で跳ねまわっている「君ら」幼子たちは、やがては少女から大人になり、花びら餅をゆっくり味わう日が訪れることだろう。眼前の時間は未来へとひらいてもいるのだ。

文体的には、助詞や切れ字を用いず、名詞のみの構成だが、ひらがなを巧みに交えながら視覚的にも簡潔でやさしい印象を生んでいる。一つ間違うと威圧的にも働く「君ら」も、ここでは幼子に向けた語りかけのようで、親しく楽しい光をくぐり抜けている。

世界中、こんな明るい一年にしたいものだ。